中養のイムズ

大阪市中学校
特別支援教育
担任者会
第87号(新3B)
令和3年9月

生育活動とICT

生育活動の目的

大領中学校の特別支援学級(サポートルーム)では、畑の活動を行っています。

先ず、生徒たちで目標とする収穫時期を決め、野菜を生育するスケジュールを考えます。

次に、担当の野菜を決め、畑の生育活動を開始します。生育活動は夏野菜と冬野菜の二期に分けて行っています。

生徒に、生育活動の行程をプレゼン資料にまとめさせ、授業内で発表させています。

そうさせることで、生育活動中の生徒の発話が増え、目標をもって積極的に作業をするようになってきました。

雨や日照りが続いたり、テストや休みで活動ができないときに、畑を気にする生徒が増え、自分たちに何ができるかを考える生徒の姿が見られるようになってきました。

プレゼン資料

生育記録について

生育記録をPCに入力し、記録しています。タブレットを利用して、写真を撮り、撮影した画像を使って絵日記のように記録させています。記録した絵日記は、ファイルにして保存し、学期末に返却しています。

畑日記を通じて、生徒たちの観察内容が徐々に緻密になり、前日との長さや重さを比較したり、他の野菜との様子の違いなどの変化を日記に書きこんだりできるようになりました。入学時の日記では、作成に向けてのサポートが必要な生徒たちですが、学年が進むにつれ、教員が気付かない些細な変化を日記に取り入れられるようになりました。

10月 4日
今日も畑日記を書きます。
今日のラディッシュは、前回と比べて、葉っぱが普通に伸びていました。
京水菜も、葉っぱが伸びていました。
野菜が成長して、「すごい」と思いました。
[redacted]

5月29日
今回のなすびは、しっかり花を付けていました。
紫色の花は、きれいで大きい花は2cmになっていました。
苗の高さは、約20cmで前回より2cmのびていました。
大きななすびができるようにいっぱい水をやっていきたいです。
大きななすびを食べたいです。
[redacted]

畑日記

生育活動では、日々成長する野菜の長さや重さ、各野菜で価格決め等して生活に必要な知識をつけることを目的に行っています。

畑の活動を通じて、担当野菜を決めていることからしっかり責任感を持てるようになっていき、生徒が自分の担当野菜を細かく観察するようになっていくことも畑活動の目的の一つになっています。

夏の畑について

夏の畑では、おいしい「大領カレーを作ろう」を合言葉に特別支援学級で夏野菜を育てています。「大領カレー」とは、大領の畑で収穫した野菜を使ったカレーで、調理は一学期末テストの日に行いました。

夏野菜は、なすび、ピーマン、きゅうり、玉ねぎ、オクラ、じゃがいも、トマトの7種類の苗を植え、生徒毎に野菜割り当てを作り、担当を決めています。

今年度は残念ながら、調理実習を行い、全員で実食をすることはできませんでしたが、作った野菜を切り、調理練習を行いました。

自分たちが育てた野菜を実際に料理に変えていく行程を楽しむことができました。

冬の畑について

冬の畑では、ラディッシュ、大根、ニンジン、小松菜、春菊などを生育し、家庭での調理をお願いしています。

家庭で行った調理の風景や完成した野菜料理を写真に収め、自分なりの料理を作ってもらっています。生徒が料理名を考えたり、保護者と一緒に取り組めたりと、生徒と保護者が一緒になって取り組んでもらえる家庭も多いです。

また、冬には、すべての総括として、プレゼン資料を作成し、年度当初から学年末までの畑の振り返りを行っています。

その中で自分が担当した野菜や活動を資料にまとめ、発表しています。

緊張してしまい、発表できない生徒もいましたが、時期を変えたり、ビデオ撮影に変更したりして全員が発表できることができました。

まとめ

生育活動を通して、日々の活動や学校生活で積極的に物事に取り組める生徒が増えたように思います。

一生懸命育てた野菜を、地域の方々が通りがかりに見て、作業中の生徒たちに励ましの声をかけていただけることも、その要因になっているはずです。

今後も地域との交流を深めながら、生徒一人ひとりに目を向けた活動を実践していきたいと考えています。

（大阪市立大領中学校　津田　丈志）

中養タイムズ

大阪市中学校
特別支援教育
担任者会
第88号（新4B）
令和3年
12月24日（金）

ブロック折り紙
～文化発表会にむけて～

主役は教室に入れなかった生徒達

新巽中の特別支援学級（総合学習室）に在籍している生徒のうち、およそ４割は欠席が長く続いたり、１日を通して学校で学習を行うことが難かったりした経験をもつ生徒たちです。そんな彼らと彼女たちが中心となって、文化発表会の作品を制作した活動を紹介したいと思います。活動をしていくなかでおこった変化や成長をご覧ください。

きっかけは抽出授業での「折り紙」

文化発表会で私たち総合学習室の展示物は、小さく織ったたくさんの折り紙を組み合わせて作る「ブロック折り紙」です。今年の展示物は折り紙を用いたものにしたいと私は密かに考えていました。それは、ある一人の生徒の行動によるものでした。

その生徒は１年生の２学期ごろから学校から足が遠のき、２年生でも長期間学校に来られないことが続きました。私は「来られた時にできることをできるだけがんばろう」をテーマにその生徒と関わるようになりました。そんな中、折り紙を折る学習に少し興味を示すようになりました。私はこの折り紙の作品をどこかで彼の作品として発表したいと思いました。そして、文化発表会で折り紙作品の展示を行うことを決めました。

折り紙、折り紙、とにかく折り紙

ブロック折り紙は、小さく三角形に折ったパーツを組み合わせて、大きな立体の作品にするのですがその量がとにかく多い。今回のテーマは「しんたつハロウィン」ということでジャック・オ・ランタンを作ろうとなったのですが、必要な折り紙はなんと１０００枚超。１枚の折り紙から２個のパーツを作ることができるので、作るパーツの数は２０００個。気の遠くなる作業。

果たして彼らはこの無限折り紙を前に最後までやりきることができるのでしょうか。

たくさん作られたパーツ

ブロック折り紙のパーツ

すごい、この子たち！

１０００枚を超えるパーツづくりにとりかかる生徒と我々教員たち。用意された大量の折り紙を前に「これ折りきれるん？」といった不安の声も聞こえてきましたが、折らないと話が進まない。とにかく折ろう！ということでブロック折り紙のパーツづくりが始まりました。

折り始めてあることにふと気づきました。「この子たち、集中力がすごい！」。１時間の時間いっぱいまで一生懸命折ります。普段は集中力が続かない子も、黙々と折り紙を折っていきます。残された折り紙の量を確認しながら「少し減った」「がんばろう」といった声も聞こえてきました。自分たちががんばった結果が目に見えるようになっていることで励みにもなり、残りも見えているのでその見通しも立ってがんばれたのではないかと思います。

パーツを作っていく生徒たち

また、折り紙が苦手であまり積極的になれなかった生徒も、みんなと一緒に折り紙に参加し、少しずつ上手に折れるようになってきたことで自信をつけてきたように感じました。

これまであまり学校行事に参加することができなかった生徒たち。自分たちが積極的に取り組んだ成果が、作品となって文化発表会で展示される。いったいどんなできに仕上がるのでしょうか。

パーツを組み立てていく生徒

そして、文化発表会当日

文化発表会前日。みんなで作った作品の展示準備です。雰囲気がでるよう黒色のビニール袋を窓に貼って光を遮ります。この準備でも、生徒たちが活躍します。特に、黒色のビニール袋を張る作業では、高いところにテープを張ったり作品を並べたり、様々なことに積極的に参加し、少し自信を持てた表情が印象的でした。

そして、文化発表会当日。特別支援学級の展示は大盛況となりました。展示されている作品を見た生徒から「すげー。」「どうなってるん？」「これかわいい。」など、好評の声を聞くことができました。特別支援学級の活動を知ってもらえる良い機会となったのではないでしょうか。また、作品作りに参加した生徒たちの得意げな表情も充実感に満ちていました。

地道で終わりの見えない作業から始まった活動でしたが、最後に生徒たちと最高の時間を過ごすことができました。

（大阪市立新巽中学校　谷崎　元気）

完成したジャック・オ・ランタン

中養タイムズ

大阪市中学校
特別支援教育
担任者会
第89号(新3B)
令和4年2月

特別支援学級見学会

まずは自己紹介…

三国中学校の特別支援学級見学会を、11月中旬の2日間に実施し、3校の小学校の児童と交流をしました。

授業や学校施設の見学、支援学級の先生や生徒との交流をしますが、三国中学校では「在校生が小学生のために司会進行をする見学会」としての特徴があります。

中学生には事前に台本を配り、その台本をもとに司会進行してもらいました。これまで人前に立って何かをする機会が少ない生徒もおり、見学会が始まる前はずっとソワソワしていました。「できるかな？」「不安だ」と吐露していましたが、「大丈夫！」「なんとかなる！」と励まし合いながら、見学会のスタートを迎えました。小学校の支援学級の児童や先生方、保護者の方が次々と入ってきました。いよいよ会が始まると、先ほどまでの不安そうな表情とは一転、胸を張っての凛々しい表情に。場の雰囲気をしっかり感じ取り、「この会を有意義なものにしよう！」という意気込みがその表情からしっかりと伝わってきました。

見学会は、①中学生の自己紹介（名前・好きなもの・趣味など）②小学生の自己紹介③ゲーム、という流れでした。

緊張感が漂う始まりでしたが「僕の名前は菅田将暉です。」と、司会の中学生が冗談を言いました。いきなりだったので大爆笑とまではなりませんでしたが、張り詰めていた緊張が緩まったように感じました。好きな食べ物を言ったり、趣味であるゲームの話をしたり、見学に来ていた小学生にもわかる話題をしていたことが印象的です。

中学生の自己紹介が終わり、次は小学生の番です。慣れない環境で発表することは簡単なことではないと思います。しかし、中学生の自己紹介を聞き、自分自身の言葉でしっかり発表しており、「学びの多い見学会になる」と確信しました。

自己紹介は、これからいろんな場面で「する必要がある」ことです。自分のことを知らない人が聞いていることを忘れ、ベラベラと好き勝手に話をしてみたり、何を話せば良いかわからず黙ってしまったり、自己紹介は難しいことだと思います。中学生のように「聞き手のことを考える」や、小学生のように「話し手の真似をする」ということが、必ず今後に活きると考えます。

ナンジャモンジャ…

パッケージがとても印象的な『ナンジャモンジャ』は、頭と手足だけの謎生物ナンジャモンジャ族が描かれたカードゲームです。

ルールは、次の通りです。カードが中央の場に次々と配られるたびに、めくった人のセンスで特徴を捉えた名前を付けます。その名前を全員で覚え、以降、めくられたらその名前をいち早く正確に叫ぶとそのカードがポイントとなります。そのポイント数で競う、といった年齢を問わず参加できる内容です。

中学生と小学生が均等な人数になるように、2グループに分かれました。小学生にとって中学生と一緒にゲームをするのは緊張することだと感じていましたが、ゲームという響きは良い意味で生徒たちの胸を熱くするものです。どの生徒も良い目をしています。いざゲームが始まると、真剣な表情で「グリーンピースさん！」など、特徴をうまく捉えた名前を全員が付けていました。多い時で5枚程度の名前を付けたゲームでもしっかり覚えていて、感心しました。ルールにはありませんでしたが、「どの人にも分かる言葉」を使って名前を付けていたこと、「みんなが笑顔になる」名前を付けていたことが、優しい心を持っている証拠だな、と感じていました。

まとめ

初めて特別支援学級見学会に参加させていただきました。授業中の様子や施設の紹介では感じ取りにくい「雰囲気・空気感」ということを生徒主体の交流会で感じ取ることができました。「支援学級に在籍すれば安心」ではなく、「こういった先輩がいるから安心」と思ってもらえる見学会が、これから通う予定の生徒や保護者にとって必要なことだと感じました。

また、中学生にとってもふだん同級生だけと接する機会が多いので、年下との関わりから「自覚」「思いやり」が芽生えたと感じます。「とても良い司会だったね」「かっこいい先輩だね」と声をかけるととても嬉しそうな表情をしていたことが、私たち教員にとっても嬉しいことでした。

どの生徒・保護者にとっても「安心・成長できる」行事を今後も増やしていきたいです。

（大阪市立三国中学校　平郡　慎也）